# 君にできることは？

## ～北極探査編～

# 君に出来ることは?〜 北極 探査編〜

作・Book pro (Book production)

メンバー

[カメ大好きっ子ちゃん] [ダンゴムシ大好きっ子くん]

[イヌ大好きっ子たん] [コマンド大好きっ子さま]

[くだもの大好きっ子ぴょん] [タコライス大好きっ子っち]

## 〈登場人物紹介〉

〈プロフィール〉

コードネーム　タートル

年齢　22歳

任務への態度　上々　知らないことが多い　冷静

ランク　ケートス

〈プロフィール〉

コードネーム　エネルジー

年齢　25歳

任務への態度　楽しんでいる

ランク　リヴァイアサン

ランク下　クジラ→シャチ→ケートス→クラーケン→シーサーペント→リヴァイアサン→ポセイドン　ランク上

# 〈プロローグ〉

あなたは知っているでしょうか。

この世の中には地球温暖化というものがあります。

地球温暖化とは、人間の活動が活発になるにつれて、大気中に含まれる二酸化炭素（CO2）等「温室効果ガス」が大気中に放出され、地球全体の平均気温が上昇している現象のことです。

地球規模で気温が上昇すると、海水の膨張や氷河などの融解により海面が上昇し、また気候変動により異常気象が頻発する恐れがあり、自然生態系や生活環境、農業などへの影響が懸念されています。

さて、この地球温暖化をどう対策するか

あなたは考えたことがありますか？

この小説では、私［タートル］と［エネルジー］の地球温暖化の考え方を描いた物語です。

さあ、あなたは地球温暖化をどう思うか、対策などを考えながらご覧ください。

## 〈本編〉

こんにちは。はじめまして。

私は［タートル］

もちろん、タートルというのは本名ではありません。コードネームです。

私は、この地球を守り、環境問題を解決する事を目的として結成された組織、《ロジィ》の隊員です。

飛び抜けたオーバーテクノロジーを、ロジィは所持しています。

ロジィの隊員は、いつもは一般人として生活していますが、本部から任務を与えられた場合、それを実行する義務があります。

ロジィの存在は最高機密。

もしも、情報をもらしてしまった場合は容赦なく分子レベルに分解されます。

『ピロピロピロリン』

軽快な音を立てて、ロジィの隊員のみ持つことが許された腕時計が音を鳴らします。

只今、本部から任務が与えられました。

腕時計がピカリと光って、空中に地図が映し出されます。ホログラムです。

この腕時計には他にもいろいろな機能がありますが、それはまた次回。

腕時計が映し出す地図上で赤く光っています。

それが、私が向かわなければならない場所です。

私は鍵をかけた事をきちんと確認し、家を出ました。

次の任務はなんだろうと、心を弾ませながら

もう使われていない、廃工場。

そこに、私は足を踏み入れます。

廃工場の中で、腕を組み瓦礫の上に座っていたのは、20代の男性。

…正確に言うと、25歳ですが。

そう、私のパートナー［エネルジー］

エネルジーは私の先輩で、頼りになる方。けれど、私は彼の本名を知りません。

ロジィの隊員同士ですら、個人情報は明かしてはいけない。それが決まりです。

「遅かったな、タートル」

エネルジーが少し不機嫌そうに言いました。

…遅かったでしょうか？任務をもらってすぐきたつもりなのですが。

まぁ、エネルジーはいつも私より早く集合場所に到着しています。

いつものことですから、特に問題はありませんね…

私がエネルジーに何歩が近づいたとき、私たちの腕時計が同時に、

『ピロンッ…ピロンッ…』

と着信音を鳴らします。

その腕時計からは、ロジィ本部からの伝言が宙にホログラムとして映し出されます。

きっと、二人が合流し、ある程度近づいた時に詳しい任務の内容が明かされる仕組みだったのでしょう。

今回は何の任務でしょう。
私はいつもワクワクしながら任務の内容を見ます。
そのため、いつもエネルジーに「任務オタク」と言われます。失礼な。
私はただ、このロジィに尽くす事に喜びを感じるだけです。
勿論、任務も例外ではありません。
…それを任務オタクと言うのでしょうか？
「今回は北極の調査らしいぞ？」
先に任務を確認していたエネルジーが、私が任務内容を見る前に言いました。
まだ少し不機嫌そうです。
任務を始めたら、きっと元に戻ると思います。
というか、そうである事を願います。
…任務に支障が出るのだけは避けなくては！
私は改めて任務の内容を見ます。
『地球温暖化による、北極への影響を調べ、現状をまとめ報告しろ』
それだけの簡潔な文。
今回は北極ですか。
かなり遠出ですね…
ですが、それが楽しみです。
私の唇の端が無意識のうちに上がっていました。
私が任務の内容を確認した事を確認すると、エネルジーが私に言います。

「それじゃあ、北極に行くぞ。行き方は分かっているだろうな？」
エネルジーが私の顔を覗き込みます。
「勿論です」
私は、腕時計の上に手をかざしました。
その横では、エネルジーも同じように自分の腕時計の上に手をかざしています。
そうすると、腕時計の上に複雑な文章（ロジィの紋章）が浮かび上がり、光を放ちました。
…何度見ても美しいですね。ロジィの紋章は。
「「北極へ！」」
私とエネルジーの声が重なり、私とエネルジーは光で包まれました。
目の前がくらりと歪むような感覚がして、私は目をつむりました。

「ん、ん…」
私は目を覚ましました。
きっと、北極にいても全然寒くないのは、ロジィの隊服を着ているからでしょう。ロジィの隊服はとても優秀で、暑さにも寒さにも強く、攻撃吸収効果もあり破れにくい素材でできています。流石、ロジィですね。隊服も優秀すぎます。
北極に移動した時と同時に、隊服に代わるという仕組みです。流石に、私服で北極に来るのは命取りです。ましてや、任務で私服を着るなんて、論外です。
少し意識がぼんやりしていましたが、ロジィの腕時計に無意識に目がいくと、頭がシャキッと覚めた気がしました。
…そうだ、任務を遂行しなくては。ぼんやりしている暇はありませんね。

私が気がつく頃にはエネルジーはもう辺りを探索していました。さすが、任務に慣れているだけのことはあります。
エネルジーも、シルバー色ののロジィの隊服を着ています。頭には、マイク付きのヘッドフォンを付けていました。
私も付けています。貴重な通信手段です。
「やっと起きたか」
辺りを見回していたエネルジーが、私が起きたことに気がつきました。
…決して、私が起きたのが遅いわけではありません。ランク・リヴァイアサンのエネルジーが例外なのです。
私は顔をしかめながらも、辺りを見回しました。

しかし、真っ白な大地ですね。
その白さに心を洗われるような気がして、私は顰めていた顔が緩みました。
北極に来るのは2回目なのだがまだ慣れません。
いや、早々に慣れることができるものではないでしょう。
「しかし、残念なことに探査隊は今は来ていないらしい」
エネルジーが言いました。探査隊が来ていれば、情報交換で、少し楽に任務が済んだかもしれなかったのに…
この北極に探査隊が来るためには、大きな船を使います。
エネルジーは、探査隊が来ているかと思っていましたが、船がなかったため来ていないと判断したようです。
「そうですか。…そういえば、前に来た時より少し暑くないですか？」
私はエネルジーに聞きます。勿論、北極が暑いわけないのですが、ロジィの隊服で体温調整がされている今、どうしてもこの気温を熱く感じてしまうのです。
「そうだな。これも地球温暖化のせいだろう。そのせいで北極の氷も溶けていっていると本で見た」

エネルジーは眉をひそめます。
北極の氷が溶けると、どんな大変なことがあるのでしょうか？
…直ぐには思いつきませんね。
彼は、人間が環境汚染や地球温暖化などの環境に手を出すことを、ものすごく嫌っています。
…少し任務への態度が軽く、苛つかない事はありませんが、本当はいい人です。
まだまだエネルジーの機嫌は治らないのですか…
任務が始まったら治ると思ったのですが、逆効果でしたか…
そんな事を考えていると、エネルジーがパソコンを持って歩き出しました。
これは、ロジィの隊服に収納されていたものです。
北極の気候に耐えられるのは勿論、防水機能、溶岩に使っても溶けない耐久値を持っていると聞きました。
「何をするんですか？」
私は正直エネルジーが、何をしたいのか全くわかりませんでした。
パソコンで何を調べるのでしょうか。
「北極の面積を測るんだ。前に測ったものと比べようと思う」
さすがはエネルジーですね。
広い視野が認められて、ランク・リヴァイアサン に昇格しただけのことはあります。
…私には決してなかった思考です。
前に来た時にも測っていたらしいです。
気がつきませんでした。せめて、パートナーなのですから、何をしたかはいちいち報告して欲しいものです。
「前に測った時は何平方キロメートルだったんですか？」

「約740平方キロメートルだったが、今は…」
エネルジーはパソコンで今の北極の面積を測りました。
「どうでしたか？」
私は聞きます。
私は暑くなっていたように感じましたが、もしそれがあっていたとすれば、氷が溶けているはずです。
「約500平方キロメートルだな。約200平方キロメートルも減っている」
「そんなに減っているんですか！？」
私はとても驚きました。
そんなに減っているとは思いませんでしたから。
ちなみに、約200平方キロメートルというのは、だいたい東京ドーム4,280個分らしいです。
こんなに北極の氷を溶かしてしまうなんて、本当に地球温暖化というのは恐ろしいものですね。
「今も少し暖かいくらいだ。このスーツは温度を平均くらいにするものだが、それでも暖かいな」
「私も、この気温を熱いくらいに感じます。…そういえば、北極に住んでいる動物などはどうなっているんですか？こんなに氷が溶けていて、何も異変がないとはとても思えないのですが」
「そうだな、どうなっているか調べてみよう。まず、その動物を探さないとな」
と、エネルジーが言います。
…ですが、見渡しても動物はいなさそうですね。
私たちは、ロジィの隊服についている機能の一つである『重力操作』を使い、宙に浮きました。
そして、なるべく離れないように気をつけながら、私たちは空を飛び動物を探します。走るより全然早いですね。
「お、いたぞ」

エネルジーが何かを見つけたようです。
「何を見つけたんですか？」
少し離れて動物を探していた私は、エネルジーの近くに着地しました。
「どうしたのですか？」
私の問いかけに応えるように、エネルジーは少し遠くを指差しました。
「ホッキョクグマだ。この動物も、地球温暖化の影響を受けているんだぞ」
「どんな影響ですか？」
私が聞きます。簡単に思いつくものは、暑さで死ぬことくらいですかね。
…けれど、そんな簡単に暑さで死ぬようなものなのでしょうか？
そんな事を考えていると、エネルジーが話し出しました。
「ホッキョクグマは、海に浮かんでいる氷の上で生活している」
「ああ、その氷が溶けているということですね」
住むところがなくなるのは大変です。
ようやく意味がわかりました。
…ホッキョクグマも、ずっと泳いでいる訳にはいきませんものね。
「そういうことだ」
エネルジーは頷き、話を続けました。
「そして、ホッキョクグマの食べ物のほとんどはアザラシなんだ。そのアザラシは、地球温暖化によりアザラシが生き残るために必要だった海氷（海の氷）の減少により、アザラシの数が減ってしまっているんだ」
「餌がなくなって餓死するという訳ですか」

「その通りだ。そして、氷の溶ける速度が1週間ほど早まると体重も11～12キロほど軽くなってしまうんだ」
エネルジーが珍しく真剣な顔で言いました。
本当に、珍しいです。
「…そうなんですか。一週間で、11～12キロも軽くなってしまう事もあるなんて」
私は顔をしかめました。
それを見て、少し柔らかい雰囲気にしたかったのか、それとも別の理由か、エネルジーがこんな事を言いました。
「一週間で11～12キロも痩せられたら、女性は喜ぶだろうな。究極のダイエットじゃないか？」
その言葉に、私は少し苛立ちを覚えました。
「…任務中にふざけないでください。任務への侮辱です。任務に謝ってください」
「お前は任務教にでも入っているのか？」
「入ってません」
私がそう答えると、エネルジーが堪えきれなかったように笑い出しました。
…私は真剣に言っているつもりなのですが。
私は少し顔を顰めてエネルジーを睨むと、エネルジーの笑いが止まりました。
それでも、後ろから少し突いたらまた笑ってしまいそうな状態です。
「北極は、もうしっかり探査できましたね。この事を報告書にまとめるために、帰りましょう」
「そうだな…」
エネルジーはまだ笑いを引きずっている。
その事に、苛立ちを覚えながら私は腕時計に手をかざしました。
エネルジーも同様です。

「「廃工場へ！」」
私とエネルギーの声が重なり、私とエネルギーは光で包まれました。
目の前がくらりと歪むような感覚がして、私は目をつむりました。

目を開いた時、私たちは廃工場にいました。
まだ、廃工場の暗さに目が慣れていません。私たちの服は、私服に戻っていました。
エネルギーはまたしても、私より先に目覚めていたようです。
エネルギーは、大きな瓦礫の一つに座り、パソコンで報告書を作っていました。
「おーい！タートル！ぼさっとしてないで、早く報告書を書け！」
…ぼさっとしていた訳ではありません。
エネルギーの笑いはいつの間にか引いていたようです。
それは良かった…と思いながら、私は大きな瓦礫の一つに座り、常備しているパソコンを起動させました。
そして、エネルギーがパソコンで作っていた報告書にアクセスして、報告書を書き始めました。

報告書をエネルギーと分担して書いているところで、私はとある疑問を持ちました。
「地球温暖化により、北極に住んでいる動物にまで影響が出ているのなら、人間の生活にも影響が出始めるのではないですか？」
エネルギーは少し笑いが落ち着いてきたのか、私の質問にきちんと答えました。
「ああ、その影響というのが温度が高くなることによる家畜の病気の原因や、夏になると行きたくなるプールで発症するプール病が出やすくなる」
エネルギーが言いました。
「あ、夏といえば、手足口病*もですよね」

手足口病とは、簡単に言うと手と足と口に発疹ができると言う病気です。

「そう。手足口病は幼児に多いからな。危険だ」

「そうですね。気をつけなくてはなりません。本当に、地球温暖化とは恐ろしいものですね。地球が暑くなって困るぐらいの被害しか出ないと思っていましが、動物の絶滅や病気にも関係あるんですね。これも報告書に書いた方が良いでしょうか」

「そうだな。情報が多い事に越したことはない」

そして、私たちは少し話しながら報告書をつくりました。

そして…

# 報告書　「地球温暖化による北極への影響」

ランク・リヴァイアサン　エネルジー　ランク・ケートス　タートル

・北極では、以前よりも3度から4度ほど温度が上がっている。

そのため、北極の面積も200平方キロメートル減っている。

・地球温暖化などにより、北極の氷が溶け、ホッキョクグマの行き場がなくなる。　そして、他にもホッキョクグマには他にも問題がある。

海氷の減少によりアザラシが減ってしまい、食べ物も無くなったホッキョクグマ　は、餓死(がし)してしまう。

そのため、例年(れいねん)よりもホッキョクグマの体重(たいじゅう)が減っている。

・また、地球温暖化による影響はホッキョクグマの他にも人間にも影響が出ている。

1　気温上昇により家畜(かちく)の病気の原因や、水の消費が多くなる。

2　病気も発症しやすくなる。

3　魚などの海の生物にも影響があるから、将来は米などの農業で採れたものしか食べれなくなるかもしれない。

・このようなことから、地球温暖化はとても危険なものだと言うことがわかった。

「こんなものでいいんですか？」
私は、報告書が思っていたよりも少なく終わった事に驚きました。
「ああ。こんなもので良いだろう。上手くまとめられたはずだ」
エネルギーが満足げに言いました。
「でも、これだけで終わるのも味気ないですね」
私が言いました。
「というと？」
そんな私の言葉に、エネルギーは興味を持ったようで、身を乗り出して話を聞いてきます。
「報告書を書くだけでは、なんだか…対策などを考えて実行しないと報告書を作った意味がないじゃないですか」
私はそう思いました。対策を考えてこそ、この地球をよくするロジィの役目だと思います。
…と言っても、対策と言っても早々には思いつかないですね。
「確かに、それもそうだな。何かないか考えてみるか」
エネルギーが言いました。エネルギーも考えてくれるのは心強いです。
「そしたらランク・クラーケンになれるかも～！」
私は心の中でそう思ったつもりでしたが、
「そう言うところだぞ？ランク・ケートスなのは」
とエネルギーに呆れられました。
どうやら、心の声が出ていたようです。
「んー、少し帰ってから考えてみるか？」

エネルジーが言いました。
けれど、私はその提案は良いと思いません。
「…寮でですか？」
ロジィの隊員はいつも寮で生活しています。
だが、地下なだけあって暑苦しく、全く頭が回らないのです。
「いやいや、休暇を取ってだ。あんなところでいいアイディアなんかアインシュタインでさえ出せないぜ？」
「そ、そうですね」
取りあえず、私は休息をとる事を選びました。こんなところで論争しても、体力がなくなるだけです。
…しかし、何があるのでしょう。パッと思いつきませんね。
私は自宅のベッドに突っ伏して考え始めました。

地球温暖化を止める方法は…地球温暖化の原因から考えた方が良いでしょう。
燃やした時に出る二酸化炭素が原因なのは分かっています。
そしたら、その廃却炉の二酸化炭素が出てくるところに空気清浄機を大量に置くとか？
でも、そんなの実現できるのでしょうか？
実現できることで、誰もが出来ること…それをポスターなどでみんなに伝えれば良いのでしょうか？
と言っても、何を？
そもそも、どうすれば誰もが二酸化炭素を出さなく出来るのでしょうか。
それは、不可能な気もしますが…
何故なら、二酸化炭素は今世界中あちこちで出ているからです。

例えば、電気を生み出す時、火を燃やした時にも二酸化炭素は出てきます。
車からも、工場からも出ています。
二酸化炭素を排出させないと言うことは、私たちの生活を退化させる事につながります。
そんな二酸化炭素をどう対策すればいいと言うのでしょう。

## 〈エピローグ〉

さて、あなたはどうやって二酸化炭素、および地球温暖化を食い止めるか。

方法は考えられましたか？

あなたが地球温暖化を食い止める救世主なのかもしれません。

偉い人じゃないと無理！とか、そういう道具がないと無理でしょ？とかと、思っていませんか？

偉くなくたって、道具がなくたって、あなたのそのアイディアがあれば問題を解決できるかもしれません。

今、この小説を読んで、北極の二酸化炭素による影響について少しはわかりましたか？

そのことを頭に留めて対策を考えてみましょう。

それが、世界で偉い人が話し合った方法よりも、いい方法なのかもしれませんよ？

〈この作品を作ったBook pro (Book production)について〉

Book proは、三鷹市立第四小学校の6年生がSDGs*を広める取り組みの中で結成されました。
私たちBook Proの取り組みの1つが小説を作り皆さんに読んでもらうことでした。
この小説がどういう風に作られたのかみてみましょう。
私たちがこの小説をつくろうと思ったきっかけはSDGsという言葉を知っていてもあまり積極的に取り組まない現状があったからです。
それは私達もSDGsを知るまでその一人でした。
ですが、私たちがSDGsのことを知るにつれて皆さんにも「もっとSDGsについて知ってもらいたい」と思いました。
そして、皆さんに楽しくSDGsについて知ってもらうためには、どんなことをしたら良いのかを考えました。
そこで思いついたのが、物語にしてわかりやすくまとめることの出来る小説でした。
そして、私たちはSDGsの小説を、『北極の現状』というところにスポットライトを当てて書きました。
誰にむけて発信したいのか。読んだ皆さんにどんなことを思ってもらいたいのかを意識して書きました。

手足口病*

エンテロウイルスによって、口の中や手足に径2-3mmの水泡性の発疹が出ます。

発熱する人もいますが、あまり熱は上がりません。

乳幼児に多い夏風邪の一種です。

・主な症状：水疱性の発疹

・主な流行時期：夏が中心、7月下旬がピーク

・この小説の作者の一人である、［カメ大好きっ子ちゃん］も小さい頃に、この病気にかかりました。

SDGs*

SDGsとは「Sustainable Development Goals」を略したもので、日本語では「持続可能な開発目標」と呼ぶ、国際社会共通の目標です。2015年9月に、150カ国を超える世界のリーダーが参加して開かれた「国連持続可能な開発サミット」で決められました。

このサミットで「持続可能な開発のための2030アジェンダ予定表（アジェンダとは計画表、行動指針という意味）」が採択されました。2015年から2030年までの長期的な開発の指針で、「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現を目指しています。そのために2030年を達成期限として定められたのがSDGsで「17の目標」と「169のターゲット(具体目標)」で構成されています。

〈出典〉

https://miraimedia.asahi.com/sdgs-description/
の一部を切り取り、また必要に応じて少々編集させていただきました。

https://sp-jp.fujifilm.com/hydroag/column/011jokin_kansensyolist.html
の一部を切り取らせていただきました。

# 君にできることは？

## ～不思議な世界編～

これは、ある星に住む少年の体験だ。
その少年の名は「ボブ」である。
ボブの住む街は、環境状態で言えば、『最悪』になる。
ボブはそんな『最悪』な街が当たり前だと思っていた。あの人と出会うまでは。

ある日ボブは、家の近くにある大きな公園に行った。その公園には、たくさんの人工林が生えていた。
ボブは怖がりで、暗いところが苦手だった。そのため怖いという気持ちが湧いてきたが、それと同時にワクワクもしてきた。公園にある登れそうな木を見つけて、ボブは登り始めた。登っていくうちに、光が見えてきた。ボブは嬉しくなって、どんどん登った。
ついに頂上まで登ると、不思議なボードゲームが出てきた。
「何だ？」
すると、どこからか変な音が聞こえてきて、ボードゲームに吸い込まれてしまった。
「うわー」

ボードゲームの中には、素敵な世界が広がっていた。そんな世界に口が開きっぱなしのボブは、隣にいた案内員のような人に気づかなかった。驚くボブに、落ち着いた声で案内員が言った。
『welcome to the strange world』
「？」
『歓迎來到神秘世界』
「？」

『ようこそ不思議な世界へ。』
「あ、日本語だ!」
『すみません、あなたは日本人なのですね。』
『ここは、2030年の地球。』
『地球は、SDGsという目標を立てることでここまで発展しました。』
「えすでぃーじーずってなに?」
『SDGsとは、人や自然を守るために世界で立てられた目標のことです。』
『それでは、今重要視されているSDGs1番、3番、6番について紹介します。　まずは1番の、貧困をなくそうについてです。』
案内員はそういうと壁の赤い印に入っていった。
それを見たボブは慌ててその印に入った。
「うわー」
印の中には、きれいな家が並ぶ街があった。いつも見ているボブの住む街と違って、一人ひとり自分の家がある。食べ物やお金で困っている人は誰もいない。
『この街は、SDGs1番を目標にすることでより良くなった街です。』
「すごい!SDGsでこんなに変わるんだぁ。」
『次は、3番の、全ての人に健康と福祉をについてです。』
次は、緑色の印に入っていった。
それを見て、ボブも入っていった。
「ここは?」
『ここは、SDGs3番を立てることでより良くなった村です。』

「そうなんだー」

『ここには、誰でも安全に、安心して暮らせる設備が整っています。』

「すごい！僕の住む街とは大違いだー」

『次は、6番の、安全なトイレを世界中に、についてです。

最後は、水色の印に入っていった。

ボブも入っていった。

そこには、清潔ではないトイレを使い、清潔ではない水を飲む人はいない。

『ここはSDGsの番、安全な水とトイレを世界中に、という目標を立てることで発展した都市です。』

「やっぱり地球はすごいなー」

「僕の住む星もこんなふうになったらなー」

（起きて、起きなさい！）

「あれ？夢だったのかな？」

「僕、この星をもっと良くしたいなー」

「そうだ！簡単にできるSDGsから始めよう！」

「小さなことからこの星をよくするぞ！」